

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520101

研究課題名(和文) 感性の理論史 美学(史)の再構築のために

研究課題名(英文) History of the Theory of Aisthesis

研究代表者

小田部 胤久(Otobe, Tanehisa)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：80211142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：美学は20世紀末より、美学の語源がギリシア語で「感性」を意味する「アイステーシス」のうちにあることに基づいて、「感性論的転回」を遂げつつあるが、美学のこの「感性論的転回」は必ずしも美学史の豊かな再編成とは結びついておらず、そのため今までの美学理論の蓄積を十分活用した理論とはなっていない。本研究は、(1) 感性論としての西洋美学の歴史的・理論的再構築、(2) 近代日本における西洋美学の移入に伴う日本の美意識ないし芸術観の理論化の過程に認められる日本的感性論の歴史的・理論的再構成をとおして、美学史研究が同時に今日の美学の根本問題を構成しうることを示した。

研究成果の概要(英文)：We have been experiencing an "aesthetic turn" of aesthetics which focuses neither on our artistic experience or creation, nor on the idea of beauty, but on the aisthesis's role in our aesthetic appreciation, or rather on our aisthesthetic consciousness of our being. In my research I revisited the history of aesthetics from an aisthesthetic point of view, aiming at reorganizing and reanimating its heritage and thereby contributing to an "aesthetic turn" of aesthetics.

研究分野：美学

キーワード：感性学 美学の感性論的転回 美的意識 共通感覚 感覚の感覚

1. 研究開始当初の背景

美学は20世紀末より、美学の語源がギリシア語で「感性」を意味する「アイステーシス」のうちにあることに基づいて、感性論的転回を遂げつつあり、またそれに伴い、美学を「感性的認識の学」と規定した美学の始祖バウムガルテンへの関心を呼び起こしつつある。しかし美学のこの感性論的転回は必ずしも美学史の豊かな再編成とは結びついておらず、そのため今までの美学理論の蓄積を十分活用した理論とはなっていない。本研究は、美学の感性論的転回に対応しうる、あるいは美学の感性論的転回をさらに促進しうる美学史の構築を求めるものであり、それは美学史研究が同時に今日の美学の根本問題を構成しうることを示す試みでもある。

2. 研究の目的

4年間におよび本研究は大きく2つの部門ないし軸からなる。

(1) 西洋美学を「感性」論として捉え返すに当たっての枢要な諸主題の歴史的解明。感覚器官(以下「感官」と記す)はいくつあるのか、感官相互の間に序列はあるのか、感官が仮に上級・下級に分けられるとしてその区別の根拠は何か、個々の感官は相互作用するのか、諸感官を関連づける器官(例えば共通感官)は存在するのか、共通感官と想像力(ないし構想力)はいかに関係するのか、感性は知性といかに関係するのか、あるいは(仮に感性がすでに認識を可能にするとして)感性的認識は知性的認識といかにかわるのか、感性は知的に意識されないもの(あるいは無意識的なもの)といかにかわるのか、感性は時間的・歴史的に変化するのか、感性のうちに習慣は作用するのか、感性には習慣を組み替える創造性が備わっているのか、さらにまた直観と感性はいかに関係するのか、こうした主題を美学史的に、すなわちプラトン以後の理論史の流れに即して、検討しつつ、従来の「美と芸術」に関する理論を主たる対象とする美学史記述それ自体を再構成する。また、直観と感性とのかかわりを検討する際には、とりわけ、「見る」「聞く」「触れる」といった動詞がどのような比喻表現として用いられるのか、にも着目し(「研究計画・方法」に記すように、「知的直観」をめぐる議論は概して視覚の比喻を用いるが、アイデアの直観といった窮極的な場面において触覚の比喻に訴えることが多い) 比喻語法のうちに見られる感性観をも明らかにする。

(2) 感性の理論における文化的・歴史的制約についての解明。これは、私がこれまで科学研究費によって2004年以後行ってきた研究、すなわち「文化的キアスムの美学」(基盤研究(B)、2004-07年、課題番号16320016)

および『『ヨーロッパ アジア』の美学的理念史』(基盤研究(B)、2008-11年、課題番号20320021)と本研究とを接続させるものである。近代日本における西洋美学の移入は、20世紀に入ったころから、日本に独自の伝統的美意識ないし芸術観の自覚化・理論化をもたらした(そして、その点についての研究は枚挙にいとまがない)。だが、そこには同時に日本的な感性(論)への自覚も認められる。それはとりわけ、1930年代以後展開された身体論のうちに読み取ることができる。本研究では間文化的(intercultural)な視点を導入しつつ、近代日本における日本的感性論の形成される過程を、西洋美学の移入を機縁としての東西の動的な相互作用に即して描き出す。

3. 研究の方法

本研究は「研究目的」に記したように、(1) 感性論としての西洋美学の歴史的・理論的再構築、(2) 近代日本における西洋美学の移入に伴う日本の美意識ないし芸術観の理論化の過程に認められる日本的感性論の歴史的・理論的再構成、という二つの軸からなる。

(1) については、カント以後の近代美学がわずかの例外を除いて感性論ではなかったことを歴史的に示しつつ、感性の理論史をプラトン以後の美学理論に即して体系的に再構築することを試みた。その中心は、プラトン、アリストテレス、ライプニッツ、カント、ヘルダーといった西洋の美学史にとって重要な思想家の個別研究のうちにある。

(2) は間文化的哲学(intercultural philosophy)の手法を通して近代日本の美学の感性論的再検討を進めるものである。主として国際会議において成果を発表した。ために、ロルフ・エルバーフェルト氏(ヒルデスハイム大学)との共同研究、(3) は九州大学の感性工学系の研究者と共同研究という形を取る。

4. 研究成果

研究成果は次の六つの点にまとめることができる。

(1) 古典的美学における感性の位置づけに関する研究

西洋哲学の原典ともいべきプラトン、アリストテレスにおける感性論の検討を行った。通常、プラトン主義は感性を否定する立場と見なされてきた。たしかにそうした捉え方は原則的には正しいとはいえ、しかし、プラトンの感性論はこうした主張に終始するものではない。プラトンは、一方では感性が感性として機能するための生理学的条件を問い、個々の感覚器官に関する唯物論的説明を試み、他方では、想起や間接知に代表されるように、可感的なものが可知的なものの認識のための出発点ないし例として機能することを明らかにしつつ、同時にまた、習慣を

通して感性的世界の秩序を自らのうちに具現する能力として感性を捉える。感性へのこうした多層的な接近のゆえに、プラトンは感性論としての美学にとってすぐれた源泉たりえていることを示した。また、プラトンを批判したアリストテレスの感性論を議論の対象とし、アリストテレスが感覚を誤謬から解放し、また感覚をその現実態に即して「生きること」の一環として正当化していることを明らかにした。

(2) 「共通感覚」論に関する研究

アリストテレスに由来する「共通感覚」論について新たな視点から検討を行った。「共通感覚」という古典古代から伝わる概念に関しては、従来から、五巻に共通の感覚というアリストテレス以来の系譜と、他者と共通の見解(いわゆる常識)というキケロ以来のローマ的系譜があることはすでに通説となっている。この二つの系譜は主観内的(intra-subjective)な次元と間主観的(inter-subjective)な次元としてりかいることもできる。こうした通説に対して、すでにアリストテレスのうちに第二の系譜の萌芽が、かつそれも豊かな萌芽が認められるという命題を対置し、カントが(隔世遺伝手金胃ではあるが)すぐれた仕方においてアリストテレスの議論を継承し発展されていることを明らかにした。

(3) 近代美学における「感性」をめぐる考察

美学はライプニッツ学派に属するバウムガルテンによって造語され創設された学問であるが、バウムガルテンによる「美学」の定義が前提としているライプニッツ哲学に遡りつつ、ライプニッツのモナド論がクリスティアン・ヴォルフを通して「経験的心理学」という学問に結実し、これが18世紀後半の「感性論」としての美学の成立を支えたことを明らかにした。その際、とりわけいわゆる宇「無意識」の概念に着目し、それがライプニッツ学派を越えて、シェリング、ヘーゲルの美学理論に果たして役割を明らかにした。

(4) カントの美学理論における「感性」の位置についての研究

カントに関しては、第一に、『判断力批判』における「構想力」の働きについて再興を加えた・カントが構想力の作用に関してもちいている Zusammenfassung / Auffassung / Zusammensetzung / Darstellung といった述語に着目し、『判断力批判』第一部における構想力についての理論がいかなる点において批判哲学に固有であり、またいかなる点で批判哲学の内部で『判断力批判』に固有であるのかを明らかにした。また、第二に、カントの『判断力批判』における aesthetisch という概念の持つ意義を、aesthetisch な意識、aesthetisch な量評価、aesthetisch な理念という三つの位相に即して明らかにした。

(5) ヘルダーの美学理論の検討

カント批判をとおして独自の立場を切り

開いたヘルダーの晩年の著作『カリゴネー』の検討をとおして、感性論としての美学が「生の技術」としての芸術という、カントにおける自律的芸術観とは全く異なる芸術観に結実していることを明らかにした。

(6) 日本の感性論についての検討

第一に、日本の感性が、中国という仮想的中心とのかかわりにおいて形成されたことを、白楽天についてのイメージの変遷に即して明らかにした。第二に、身体意識としての感性の働きについて、とりわけ「共通感覚」論をとおして考察を深めることをとおして、近代日本における共通感覚論に新たな光を投げかけた。さらに、第三に、日本における近代美学の黎明期において、「美的生活」という概念が中心的役割を果たしたことに着目し、そこに近代日本の美学の基本特徴があることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計13件)

小田部胤久「『われわれは一つの思考する / 永続的な共通感覚器官である』 ヘルダーの命題をめぐるカッシーラーとメルロ＝ポンティ」『美学芸術学研究』33/34号、2015年、印刷中、査読なし、Tanehisa Otabe, The Idea of "Common Sense" Revisited: A Contribution to an "Aesthetic Turn" of Aesthetics, in: Revisions of Modern Aesthetics, ed. By Misko Suvakovic et al., International Scientific Conference, Proceedings, University of Belgrade - Faculty of Architecture, 26-28 June 2015, pp. 493-503. 査読あり(その後SAJ (Serbian Architectural Journal), 7 (2015), Revisions of Modern Aesthetics, Part 1, 2015, pp. 37-46 に再録)

小田部胤久「モナドロジー的世界観の美学的意味」『モルフォロギア』第37号、2015年、36-48頁、依頼原稿

小田部胤久「カント『判断力批判』における「構想力」と「内官」再考 感性論としての美学への一つの寄与」『美学』第245号、2014年、1-13頁、査読あり

Tanehisa Otabe, Das Problem des "sensus communis". Die Wahrnehmung des Wahrnehmens (Aristoteles) und das aesthetische Bewusstsein (Kant), in: JTLA 39 (2014), pp. 69-82. 査読なし

Tanehisa Otabe, On an Aesthetic Consciousness of our Being: Toward a Contextualization of Shusterman's Somaesthetics, in: International Yearbook of Aesthetics, vol. 18, 2014, pp. 117-123. 査読あり

Tanehisa Otabe, Das Unbewusste im

letzten Viertel des 18. Jahrhunderts aus ästhetischer Sicht, in: JTLA 33 (2013), pp. 50-70. 査読なし

小田部胤久「Auffassung / Zusammenfassung / Zusammensetzung / Darstellung カント『判断力批判』における「構想力」について」『美学芸術学研究』32号, 2013年, 105-152頁. 査読なし

小田部胤久「美学の生成と無意識 三つの系譜に即して」『思想』2013年4号, 81-96頁, 依頼原稿

小田部胤久「ライブニッツからの感性論 = 美学 微小表象論の射程」第62回美学学会全国大会「たそがれフォーラム @ 仙台」発表報告集 <http://www.sal.tohoku.ac.jp/estetica/forum-otabe.pdf> 2012年, 依頼原稿

小田部胤久「『肉の軟らかい人々は思考の点で素質に恵まれている』 アリストテレスの感性論に寄せて」『美学芸術学研究』31号, 2012年, 99-125頁, 査読なし

Tanehisa Otabe, Platon und die ästhetische Wende der Aesthetik, in: JTLA 32 (2012), 51-64. 査読なし

小田部胤久「『無意識』をめぐるヘーゲルとロマン主義 美学(史)の立場から」『ヘーゲル哲学研究』第18巻, 2012年, 46-57頁, 依頼原稿

〔学会発表〕(計10件)

小田部胤久「『美的生活』論争の射程」京都土井道子記念シンポジウム「美」(招待講演)2015年12月25日, 京都大学(京都府・京都市)

小田部胤久「『ästhetisch に意識する』とは何か」カント協会第40回大会, 2015年11月14日 清泉女子大学(東京都・品川区)

小田部胤久「『美的生活』論争の射程」The International Conference of Aesthetic Consciousness of East Asia, organized by The Academy of Korean Studies, 2015年10月30日, ソウル(大韓民国)招待講演

小田部胤久「晩年のヘルダーの美学的思考の射程 感性論から生の術へ」日本ヘルダー学会 秋期研究会 2015年10月18日立教大学(東京都・豊島区)招待講演

Tanehisa Otabe, Toward A Problem Area of 'Common Sense': From Aristotle's 'Perception of Perception' to Kant's 'Aesthetic Consciousness' in: 14th International Congress for Eighteenth-Century Studies, ISECS 2015年7月28, ロッテルダム(オランダ) Tanehisa Otabe, The Idea of "Common

Sense" Revisited: A Contribution to an "Aesthetic Turn" of Aesthetics, in: Revisions of Modern Aesthetics, International Scientific Conference, 2015年6月28日ベオグラード(セルビア)

小田部胤久「モナドロジーの美学的意義」ゲーテ自然科学の集い大会 2015年11月2日慶應義塾大学(東京都・港区)

小田部胤久「感性論としての美学からみたカント『判断力批判』」美学会東部会例会, 2014年5月31日慶應義塾大学(東京都・港区)

Tanehisa Otabe, On an Aesthetic Consciousness of our Being: Toward a Contextualization of Shusterman's Somaesthetics, in: The 19th International Congress of Aesthetics, 2013年7月24日クラクフ(ポーランド)招待講演

小田部胤久「ミメーシスとパラダイグマ 美学的一考察」日本フランス語フランス文学会 2012年度春季大会ワークショップ「フィクション論の現在」、2012年6月3日, 東京大学(東京都・文京区)招待講演

〔図書〕(計9件)

小田部胤久「共通感覚の問題圏 感覚の感覚 (アリストテレス)から美的意識 (カント)へ」、栗原隆・座小田豊編『生の倫理と世界の論理』東北大学出版会, 2015年, 15-45頁, 依頼原稿

Tanehisa Otabe, Aesthetik in Japan. Am Beispiel der Auseinandersetzung mit dem chinesischen Dichter Haku Rakuten, in: Laenderbericht Japan. Die Erarbeitung der Zukunft, hrsg. von Raimund Woerdermann und Karin Yamaguchi, Bonn 2014, S. 405-417. 依頼原稿

Tanehisa Otabe, Japanese Aesthetics seen from an Inter-Cultural Perspective, in: Diversities in Aesthetics: Selected Papers of the 18th Congress of International Aesthetics, ed. by Gao Jianping and Peng Feng, Beijing, July 2013, pp. 417-428. 査読あり

Tanehisa Otabe, Drei Stufen der Globalisierung im Hinblick auf das Verhaeltnis zwischen Europa und Japan. Ein Beitrag zur interkulturellen Aesthetik, in: Wolfdiertich Schmied-Kowarzik, Helmut Schneider (Hg.), Zwischen den Kulturen, Im Gedenken an Heinz Paetzold, Kassel University Press, 2012, S. 30-43. 依頼原稿

Tanehisa Otabe, Grund der Seele. Ueber Entstehung und Verlauf eines aesthetischen Diskurses im 18. Jahrhundert, in: Proceedings des XXII. Deutschen Kongresses fuer Philosophie, Welt der Gruende, Hamburg 2012, S. 763-774. 依頼論文

Tanehisa Otabe, Kunst des alten Japan im Weltstrom. Zur Kulturphilosophie des fruehen Tetsuro Watsuji, in: Sinnhorizonte. Weltphilosophien zur Bildbarkeit des Menschen, hrsg. von Claudia Bickmann und Markus Wirtz, Nordhausen 2012, S. 175-190. 依頼原稿

Tanehisa Otabe, Genius as a Chiasm of the Conscious and Unconscious: A History of Ideas Concerning Kantian Aesthetics, in: Piero Giordanetti, Riccardo Pozzo, Marco Sgarbi (Eds.), Kant 's Philosophy of the Unconscious, Berlin 2012, pp. 89-101. 依頼原稿

小田部胤久「ライプニッツからバウムガルテンへ 美的 = 感性的人間の誕生」神崎繁・熊野純彦・鈴木泉編『西洋哲学史 IV』講談社、2012年、113-164頁、依頼論文

小田部胤久「レーヴィットと日本 文化の複層性をめぐる一考察」稲賀繁美編『東洋意識 夢想と現実のあいだ』ミネルヴァ書房、2012年、75-100頁、依頼論文

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/teacher/data/base/29.html>
<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/staff.html#otabe>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小田部 胤久 (OTABE, Tanehisa)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：80211142

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()